

美術館の中には、学校でいう保健室のようなところがあります。それが修復室という所です。作品も物質によって出来ている以上、劣化は免れません。文化財とはいえ、時に対して免罪符を持っている訳ではないからです。病氣もすれば怪我もする、人間と同じです。



↑これは外部の修復家にお越し頂き、館内で所蔵作品の保存処理をお願いした時の写真です。

人間でいうところの往診ですね。修復室はこのような作業を想定して外光が入る様に設計されています。

この時は画面の張りの調整と洗浄、剥落留をお願いしました。

また修復室は強い溶剤を使ったり、カビの生えたものの乾式クリーニングを行う事を想定して、大きなフーバー（吸い込み装置、換気フードのようなもの）がついています。



時々誤解されることですが、愛知県美術館の保存担当学芸員は修復家ではありません。修復家がお医者様だとすると、保存担当は学校の養護の先生のようなものです。作品が傷む・・・、劣化するといっても、突然、本格的な修復をしなければどうにもならないというような状態に、一足飛びになるということは非常にまれです（まったくないわけではありませんが）。人間と同じく少しずつ老いてゆくのが普通ですし、日頃はそれができるだけ緩やかになるよう、むしろ作品環境の方を厳しく管理しています。作品は常に観察がされ、具合が悪い所は早め早めの処置を心がけています。

作品を保存してゆくのに一番大事な事は修復に先立つ予防です。だから近現代美術が多い愛知県美術館の保存担当は、修復作業は外部の専門家にお任せし、予防のための活動の方を中心に行っているのです。

(N. N.)